

欧洲でいま



三島が熱い

寄稿 井上 隆史

いのわえ・たかし 1963年生まれ。山口県女子
大文学部教授。『三島由紀夫 虚無の光と闇』『暴流
(死)の人 三島由紀夫』など著書多数。

ヨーロッパで新たな三島由紀夫ブームが起っている。地球上にすみだした宇宙人同士の闘いを描く『美しい星』はじめ英訳され、依頼を受けて危険な仕事を請け負う青年がアジアを舞台とする巨大犯罪に巻き込まれてゆく『命売ります』もこの数年でフランス語、英語、イタリア語に相次いで訳された。それらは、切腹した現代のサムライという紋切り型の三島像に収まりきらない前衛的なSF小説、あるいはスペイン小説のパロディとして、新鮮な驚きをもつて迎えられている。

パリ中心地の文化施設イメージ・フォーラム(Forum des images)では、昨年10月から毎月15日あら「日本・ミハヤシ・コレクション」(Le Japon, M

ishima et moi)が開催され

いる。

このイベントの特徴は、第一

に『豪華』、『午後の東航』や

『三島由紀夫VS東大金共闘』

など三島の原作映画や三島出演

作だけでなく、三島が好んだ洋

画、戦前・戦後の邦画、現代ア

ーティカルゲームに至る

まで様々な映像作品が毎日のよ

読む 体感する 濃密に語り合う

より良く深く生きる「力」求めて



パリのイメージ・フォーラムで開催された三島由紀夫をめぐるトークイベントに参加した笈田ヨシさん(右から2人目)と筆者(同4人目)

笈田は現代演劇の巨匠ピーターブルックに師事したことでも知られるが、それ以前には、文部省で8歳年長の三島の知遇を得ていた。自決の知らせを聞き、三島さんは『死』をやり遂げたのに、自分はこの世で話していないことがからして、自分自身を責めなかったことがで

、『三島さんは『死』をやり遂げたのに、自分がこの世で話していないことがからして、自分自身を責めなかったことがで、自分の苦しみが続いた。だが、

その点は残念だが、それにしてもパリの中心部にこんな濃密な場があるとは! 今、ヨーロッパで三島が読まれているのは、単にその多様性が人々を魅了しているからではない。三島

文学には、物事を根底から考え直させる「力」がある。それは、曰くと沉迷を深める21世紀をより良く、より深く生きるよう私たちを促す「力」でもあることに、眞摯(まこと)に始めたの

笈田は現代演劇の巨匠ピーターブルックに師事したことでも知られるが、それ以前には、文部省で8歳年長の三島の知遇を得ていた。自決の知らせを聞き、三島さんは『死』をやり遂げたのに、自分がこの世で話していないことがからして、自分自身を責めなかったことがで、自分の苦しみが続いた。だが、

その点は残念だが、それにしてもパリの中心部にこんな濃密な場があるとは! 今、ヨーロッパで三島が読まれているのは、単にその多様性が人々を魅了しているからではない。三島

文学には、物事を根底から考え直させる「力」がある。それは、曰くと沉迷を深める21世紀をより良く、より深く生きるよう私たちを促す「力」でもあることに、眞摯(まこと)に始めたの

日本について聞かれたら、15年後の日本のことを語るだろう」と笈田は答えた。一瞬、会場が凍りついたように思われたのは、皆の脳裏に、日本と世界の未来像が思い浮かんだために違いない。

客席とのやり取りでは、安倍晋三元首相の保守思想との共通点と相違点も話題になった。言葉の存在、精神と肉体の関係をめぐる思索は三島独自のユニーク・パルメ、『三島の謎』(Mystère Mishima)の著者ビナントール大学哲学科教授のティエリー・オケ、また「ミック・三島一のが死はねが最高傑作』(Mishima: Ma mort est mon chef-d'œuvre)の作者のを招いた公開座談会や朗読パフォーマンスなど、ステージと客席を一体化するイベントが多数用意されていたことである。昨年12月7日には、パリ在住の俳優・演出家である笈田ヨシが登壇し、私も参加した。